ISSN 1345-0379

KOTOBA NO UMI

ことばのうみ

宮城県図書館だより

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY No. 30 2009. 3

特集 図書館のお仕事 その2 ・県域の図書館を結ぶ・

みやぎ本の杜

●宮城ゆかりの作家を、作品の一節とともに紹介します

伊坂 幸太郎

（いさか・こうたろう）

伊坂氏は、1971年千葉県生まれで、仙台市在住の小説家です。2007年の作品『ゴールデンスランバー』（新潮社）で第5回本屋大賞及び第21回山本周五郎賞を受賞し、また2009年4月には『重力ピエロ』（新潮社）が仙台・宮城ロケにより映画化、公開されるなど、ますます注目が集まっています。

作品そのものの魅力とともに、「広瀬通りを西へ向かい、大学病院に突き当たる道で信号待ちとなったところだった。病院の看板が浮かび上がるように光っている」（『ラッシュライフ』新潮社、2002年）といった、仙台の風景が多く描かれることも、みやぎの読者には嬉しいポイントです。

『重力ピエロ』

春が二階から落ちてきた。

私がそう言うと、聞いた相手は大抵、嫌な顔をする。気取った言い回しだと非難してきたり、奇をてらった比喩だと勘違いをする。そうでなければ「四季は突然空から降ってくるものなんかじゃないよ」と哀れみの目で、教えてくれたりする。

春は、弟の名前だ。

頭上から落ちてきたのは私の弟のことで、川に桜の花弁が浮かぶあの季節のことではない。

春は私の二年あとに生まれた。パブロ・ピカソが急性肺水腫で死んだのがまったく同じ日で、一九七三年四月八日だった。

弟が生まれた時、私ははしゃいでいた。覚えているわけがないが、そのはずだ。少なくとも、親の苦悩や、周囲の人間の冷ややかな目の理由には気づいてもいなかった。

そして、その弟が二階から落ちてきたのは、それから十六年後、つまり彼が高校生の時のことだ。

（『重力ピエロ』新潮社　二〇〇三年　七ページより）